7-6　岡山県におけるてんかん診療　現状と課題

岡山大学病院てんかんセンター・発達神経病態学（小児神経科）　秋山倫之

要　旨

岡山大学病院は 2015 年 11 月に、厚生労働省の「てんかん地域診療連携体制整備事業」 の一環として岡山県からてんかん診療拠点病院に指定された。先立つ 2013 年 12 月には患者団体からの強い要請を受けて、院内にてんかんセンターを設立していた。背景には歴史的に岡山大学では基礎研究と臨床・脳波学的研究の蓄積があり、多くの抗てんかん薬の治験に携わってきた経緯がある。その経験の上に近年てんかん外科治療を推進して、てんかんセンターを構成する諸診療科・部 門のチームワークにより難手術を成功させている。さらに、てんかん診療整備事業の位置付けで岡山県てんかん地域診療連携会議においては岡山大学病院を三次診療機関とし、てんかん診療エキスパートのいる 24 病院・施設を二次診療機関として、日頃の抗てんかん薬処方や合併症芯どの診療を行う一次診療機聞を併せて連携網を構築している 。整備事業の連携網を作ることは、二次診療機関を増やし、岡山大学病院を中心とした高度診療と地元での生活に密着したきめ細かい日常診療の両立を図るきっかけになった。

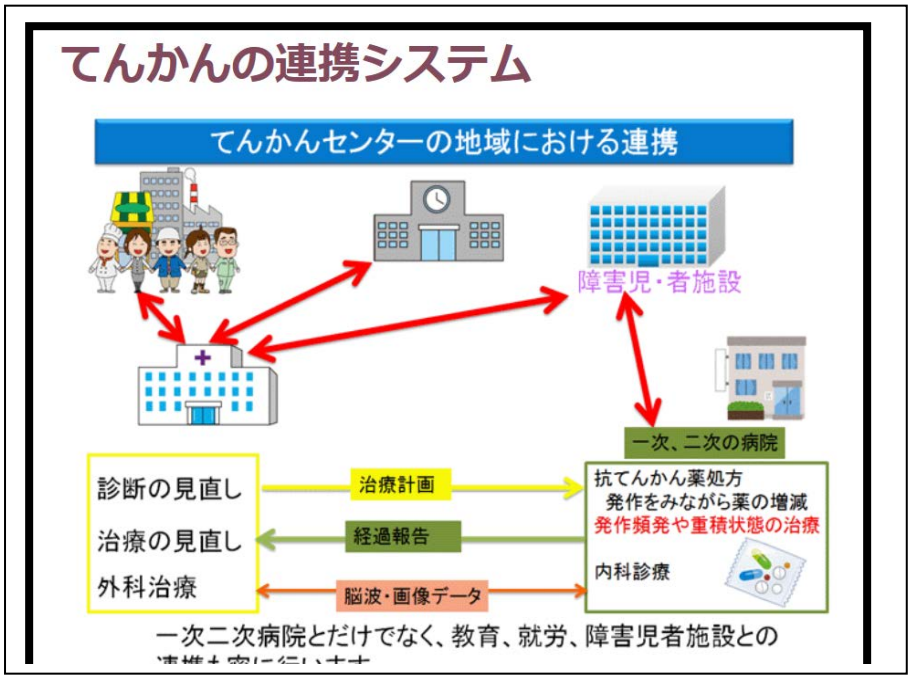
また医師以外に看護師、ソ シャルワー力—、県行政関係者、てんかん協会岡山支部の患者・家族代表からなる岡山県てんかん治療医療連携協議会を構成し、より良いてんかん診療のネットワークを形成するための方策について定期的に協議しており、整備事業によりホー ムページ開設と啓発のためのリーフレット発行ができた。

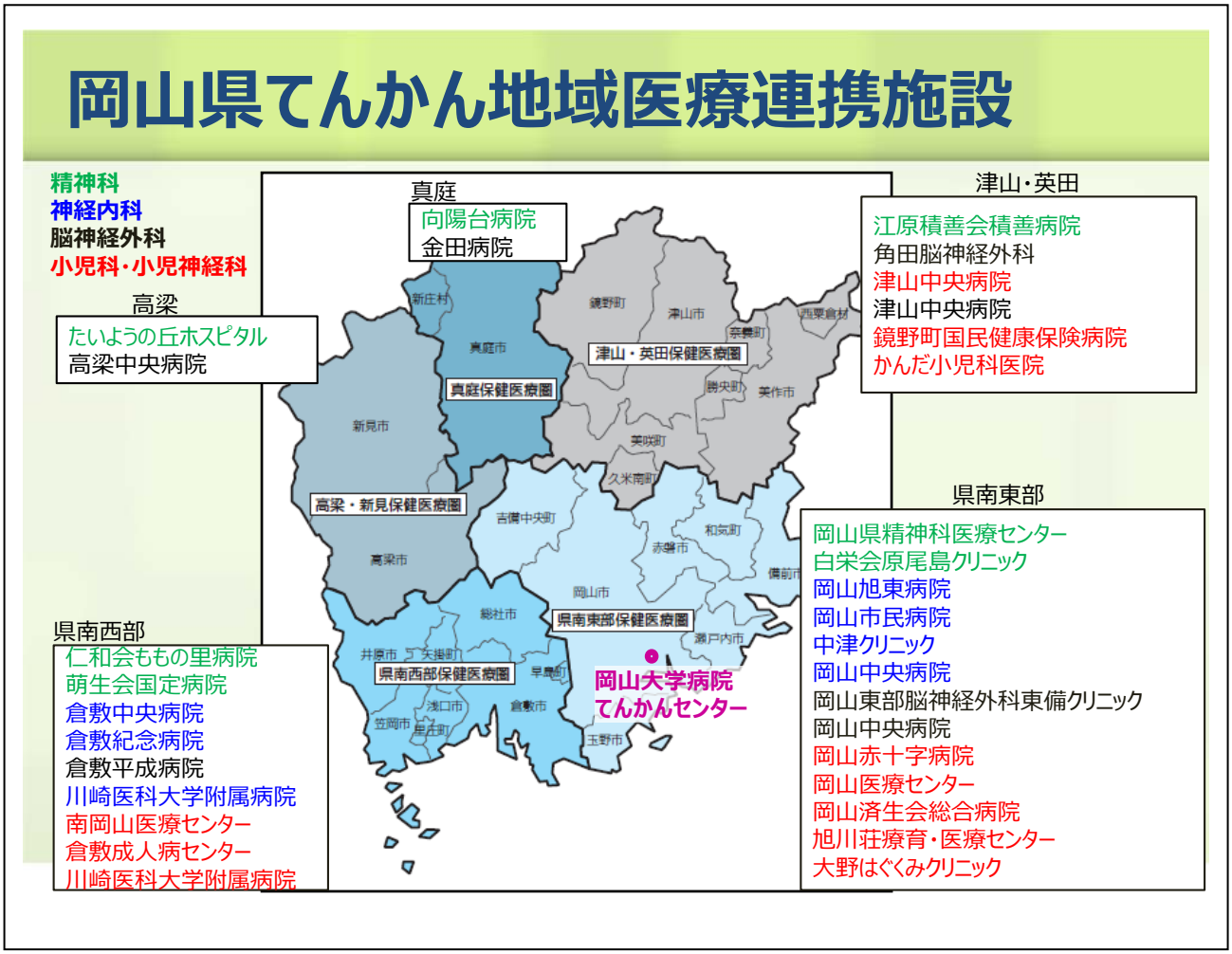
岡山大学病院の患者の年齢別構成を調査したところ、小児神経科で診療するてんかんの患者の実に 4 割近くが 18 歳以上であることが分かった。小児期発症の患者をいかに成人期医療に移行するかは、岡山県のみならず全国的懸案であるが、整備事業の中で岡山県では患者の移行が徐々に成果をあげつつある。次なる課題はてんかんに関わる医師の偏在を如何に解決するかである。

1.　背景

てんかんの地域連携システムは図のように考えているが、岡山県では、図のように 5 つの 2 次医療圏があり、てんかんの二次連携医療施設としては図のようなものがある。

県の北部は二次医療施設が少なく、医療過疎地になっているだけでなく、岡山県は広く、交通事情、特に高速道路が岡山市に直結していないため、県の北部からの受診が困難である。





2．岡山県てんかん治療医療連携協議会

医療、行政、患者本人、家族、てんかん協会岡山支部から構成されている。

3．岡山県てんかん研修、啓発活動（2016 年度）

リーフレットの作成、市民講座、研修会を 11 回行った。

例年、小児デジタル脳波ハンズオンセミナーを行い、全国から多くの医師が参加している。

所属・職位
岡山大学病院てんかんセンター長・脳神経外科教授
岡山大学病院副てんかんセンター長・小児神経科准教授
岡山大学病院小児神経科教授
岡山大学病院ソーシャルワーカー
岡山大学病院小児専門看護師
岡山県備前保健所長
岡山県精神保健福祉センター
岡山県行政職
保健師
てんかん協会岡山支部会長
患者
患者家族

オブザーバー　2 名

４．拠点機関の診療指標の推移

てんかんセンターが設立されてからてんかん外科の手術数が 4－5 倍に増え、特に乳幼児のてんかん性脳症に対する手術を積極的の行っており、良好な手術成績を得ている。

５．今後の課題

1）予算を人的資源に事実上使えない。

てんかん専門相談窓口設置のため、専門の精神保健福祉士を雇う予算が、現在の補助金金額では全く足りない。やむなく、総合患者支援センターでソーシャルワーカーが対応する体制を構築し、再来患者は、主に医師が対応しているのが現状である。

岡山県てんかん啓発活動（2016年度）

活動	題	対象
第24回精神保健てんかん県民講座	てんかんとはどんな病気？その基本から日常生活まで	一般
岡山大学公開講座 岡山健康講座2016―やさしい保健と健康の話―	脳波は頭の電気活動	一般
岡山県病児保育協議会研修会 教育講演	子どものけいれんとてんかん	保育士
てんかんセンターカンファレンス	ケトン食療法	栄養士、医療関係者
日本薬学会･日本薬剤師会･日本病院薬剤師会 中国四国支部学術大会	てんかんの病態と薬物治療	薬剤師、医療関係者
第46回中国四国点頭てんかん研究会	小児難治てんかん－病態生理の新たな視点	医療関係者
第95回小児てんかん懇話会	小児難治てんかんに対する外科治療	医療関係者
水島学術講演会	てんかんに関する最近の話題	医療関係者
岡山てんかんフォーラム	てんかん診療連携を考える	医療関係者
岡山桃太郎会	小児のてんかん－診断と治療の基本－	医療関係者
てんかん協会岡山支部市民公開講座	大人のてんかん、子供のてんかん	一般

2）移行医療の必要性

2015 年度、岡山大学病院てんかんセンターの延べ再来患者数： 14,718 人 （1 日平均 65 人）であるが、18 歳以上の患者 2,013 人中、668 例（33.2%）を小児神経科で診療していた。

しかし、2015 年度の岡山大学病院てんかんセンターの初診患者数 491 人のうち、18 歳以上の患者は 245 人であるが、その中で小児神経科受診は 8 人（3.3%）であり、初診患者では成人科への移行が成功しつつある。

3）岡山県てんかん地域医療連携施設の偏在

連携施設へ「てんかん専門医ガイドブック」を配布したが、それだけでは不十分で、連携施設から、一層の症例検討会・勉強会の開催が必要、特に脳波判読についての勉強会、小児神経科からのトランジションの問題、特にバルプロ酸内服中の妊娠可能な女性の問題、などが指摘されている。

4）さらに地域連携を進めるためには

岡山、倉敷のみでの研究会等の開催では遠方地域の医師は参加が困難であり、地域へ出向いての啓発活動が重要で、あるいは症例、脳波検討会などのネットワーク会議の活用、小児科・小児神経科医のトランジションに関する意識改善などが必要である。